

の廻國説ミ其信仰」「平戸島の離れ切支丹」「切支丹ミ佛教」の十五篇、何れも史學雜誌その他に一度發表されて、かなりの反響を當時の學界に喚起したものが少くない。

初期の親鸞研究から最近の切支丹研究まで、研究對象の變移の爲めに苦惱はあれど、切支丹ミ佛教の比較研究はかうした苦闘から來た著者の獨壇場ミ云つてよい。(菊版一〇一九頁、東京麴町教育研究會發行、價一〇圓)

●概説日本佛教史

橋川 正著

著者は數年來大谷大學で日本佛教史を講述するに適當な教科書のない不便を感じてこの概説を書いたのであるミ云ふ。教理及び宗派僧團の變遷のみならず、その俗世間に作した社會的意義を示すことに努力し、尙ほ美術工藝の意匠の上にはれる佛教的理念にも觸れて一つの渾然たる佛教文化史をなした。敘述の方法については特別の新味はないが極めて用意周到で親切であるミ云ふことが出來よう。日本佛教史全體の見通しをする爲めには恰好の良書であるに相違ない(菊版三八七頁、東京文獻書院發行、價二、五〇)(以上布村)

●武家時代の研究 第二卷 大森金五郎著

既刊の第一卷ミ共に源平時代を取扱ふ。先づ奥州藤原氏の事業ミ文化に筆を起し次いで平氏の勃興ミ覆滅を叙し源平交戦を説き頼朝奥州を征して天下統一の成つたところで終つて居る。著者の大日本全史のいはゞ各論をなすものであるが故に「詳密なる大日本全史」ミいふべき感じが與へられる。著者の懷抱する歴史地理的興味が隨所にあらはれて居る點が一の特徴をなして居る。研究態度については時代本質の把握について憾ミすべき點がないでもない様であるがミにかくこの國史界の大先輩の力作たるを思ひ愈その精進を祈る次第である。(菊判七四三頁、東京富山房發行、價三、三〇)

●日本庶民教育史

石川 謙著

そのサブタイトルに「近世に於ける教育機關の超封建的傾向の發達」ミあるは問題の取扱に於ける著者の態度をよく示すものである。この見解の下に著者は先づ近世の學校論が君侯中心觀より士民本位となりし結果出席強制、學校公營、萬人教育、教課目改造等が唱へられ聽て教

育の國家統制論を生ずるに至りし事かゝる學校論の發達に對應する藩閥の發達はその方針を人文主義より實科主義へ轉向せしむるに共に寺小屋教育法が藩閥に浸入し同時に庶民に對する藩閥の解放が行はれその間に郷學の發生を見たがこれぞ公學校觀念の實現を意味するものである。こゝで寺小屋教育の本質を顧みてこれを初歩的庶民的なりとし最後に寺子屋の普及を論じてその發達が民衆の經濟生活と併行的關係にありし事及庶民の文化的欲求の絶えざる向上によるものとした。如上の見解は近世庶民教育の性質に關する略妥當なる把握とすべく著者が日本教育史料その他のいはゞ有りふれたる資料によりつつこの業績を挙げられた事は最多とせねばならぬ、なほ著者が研究の中心とするところは往來物であり本書はその序論をなすものであらう。四冊を以て完結せんとするその研究の速かに成らんことを切望する。（菊判四五八頁 東京刀江書院發行、價四、二〇）〔肥後〕

● The Documents of Itiki Dr. K. Asakawa

亞米利加イエール大學史學科教授ドクトル朝河貫一氏

の多年の勞作である入來院文書の英譯が、同大學歴史出版物の第十三冊として發行された。入來院文書は、その含む文書種類の豊富の故に、又年代の前後多年に亘れる故に、日本封建制度の研究に恰好なる資料を提供する。この見地から朝河氏は往年歸朝の際親く同家を訪ひ文書の原本を精査された成果を以て、封建制度そのものについてより正しき理解を得る爲に我國のそれに比較資料を求めんとする西洋の學者達の要求に應じて、又彼等が我國の封建制度を僅かに我國の學者の著作を通じて知るにすぎない不滿を満す爲に、始めて此代表的資料を提供してその直接研究に役立てんと試みられたものが本書である。従つて本書は文書の忠實な紹介を主たる目的とするものであつて、文書の上に組立てられた氏の研究成果はこれに據つて期待さるべきではなく、各自の研究によつて學説を組立てんとする學者にその源泉を提供せんとするものである。

四六倍判四四二頁、最初の卅六頁は南九州の地理的文化的特性、島津莊、島津家、澁谷家、入來院、入來院文書